

# 渥美半島方言助詞の研究 (前篇)

江 端 義 夫

(2002年9月30日受理)

A Study of Grammatical Particle on the Dialects in Atsumi Peninsula in Japan (the first part)

Yoshio Ebata

This paper has described various particles of the sentences on the dialects of Atsumi Peninsula in Aichi prefecture in Japan. Those particles are classified in five kinds. They are a Kaku particle, Kakari particle, Fuku particle, Setsuzoku particle and Bunmatsu particle.

This descriptive work are divided in two sections. The first part of two is written about the Kaku particle and Kakari particle. The other will be describe at next time the other day in future.

We will be able to recognize the systematic descriptive model on the whole dialectical particles of certain district, that is, an Atsumi Peninsula, in Japan. It will become a standard example of the grammatical description of those items.

## 目 次

はじめに	第四部 副助詞叙法
第一部 格助詞叙法	第五部 接続助詞叙法
第二部 係助詞叙法	第六部 文末詞叙法
第三部 係り結び叙法	おわりに

た方々のお名前を記させていただいている。

1960年4月4日

[赤羽根] 河井清信 (60歳) 農業

[赤羽根] 伊藤定男 (38歳) 商店

[赤羽根] 伊藤春子 (37歳) 商店

[福江] 76歳の老男, 商店

1960年4月5日

[福江] 40歳の女性, 旅館

[福江] 75歳の女性, 農業

[小中山] 小川ふくみ, 小川志づ, 小川行水, 小川久幸, 小川千枝, 小川久広, 小川幸二, 小川弘達, 僧職

[小中山] 森下和子 (中学生), 森下真理子 (中学生) 小川猶作, 小川美恵子, 小川三千子 (中学生), 小川一好 (小学生)

森下悟, 森下三千代, 森下幸司, 森下勝平, 森下ひさ, 森下幸世, 森下和子

[堀切] 小学生男女,

[堀切] 渡合 (老男77歳), 農業

[堀切] 中年男子, 食料品店

1960年4月6日

## はじめに

### 1. 目的

本研究は愛知県渥美半島の方言を一つの方言共時態と見定め, そこで運用されている方言助詞の表現論的機能を全一的に把握し, 記述することを目的とする。方言助詞の記述においては, 文表現を単位として生活場面を描写する方法による。従って, 語義を中心とした抽象論ではなく, 助詞が言語生活で, どのように人々の間で使用されているかを具体例に基づいて記述するものである。

### 2. 方言資料

本研究で使用する方言資料は, 1960年 (昭和40年) 4月4日から4月7日迄の4日間, 江端義夫が渥美半島を臨地調査し, 以下の地点で実例を採録したものである。地点の後に, その土地の方言を教えてください

- [堀切] 80歳代女子, 子守り  
 [赤羽根] 中年女子  
 [田原] 80歳男子 竹細工職人  
 [田原] 75歳女子 主婦  
 [田原] 中年 (35歳) 女子 呉服店  
 [波瀬] 80歳男子  
 70歳女子  
 [田原] 76歳男子  
 [田原] 老男女 (70歳代) 雑貨店  
 [田原] 70歳代女子, 旅館

1960年4月7日

- [豊橋市伊古部町] 田中恒雄 (40歳代),  
 田中愛次 (80歳) 老女も  
 [豊橋市高豊村] 金子東一 (81歳), 金子こまつ  
 (81歳), 金子千代子 (53歳)  
 [豊橋市植田町] 浦川正一 (63歳)

以上の方言調査で収集した自然会話資料を一括して渥美半島方言とみなし, 方言助詞の研究で使用する。

### 3. 先行研究状態

本研究より以前に, 渥美半島方言の全一帯をとらえて, 方言助詞の記述的研究を実施したものを管見では知り得ていない。ただし, 昭和初期に, 当該地方の豊橋市について, 特色のある方言語彙が方言集という形で報告されたことがある。

### 4. 本稿の表記法について

本研究では, 方言文例を片仮名で表記する。片仮名の上に棒引きでアクセントの山を記す。高低アクセントが棒引きで表示される。当該方言には国際音声字母を使用しなくてはならない必要性は認めにくい。特別の事情がない限り, 片仮名で表示することとする。

○カッコガ ワルイ。恰好が悪い。

青男→中女, 赤羽根上の文例では○印が実例の表示, 片仮名で発話音声を表示し, その後に共通語訳がくる。当該発話が青年男子から中年女子に行われ, その発話が「赤羽根」集落であることが表される。収録日が克明に示されるべきであるが, 1960年4月4日から4月7日に限定されているので, 強いて, その文例毎に記すことを省略した。

## 第一部 格助詞叙法

### 第一章 主格「ガ」助詞叙法

#### 第一節 「ガ」格助詞叙法

「ガ」格助詞の叙法は, 当該方言で二つに分かれる。

一つは「ガ」格助詞が顕在化する表現である。他方「ガ」格助詞が無助詞化する表現がある。

「ガ」の顕在化する表現が当該地方では, 比較的多い。たとえば, 次のような文例がある。

○ソーユー キガ シル フン。そういう気がするねえ。 老男→老男, 中山

○トデガ ネー カイフー。とげが無いかねえ。

老男→老男, 小中山

○ヨツワガ アル。4つ輪がある。

老男→老男, 赤羽根

○ツチガ ソット ツオイ。土がずっと強い。

老男→老男, 赤羽根

○ソフ ゼニガ ナカナカ…。その銭がなかなか…。

老男→老男, 田原

○カジガ アヤガロータ フ。火事があったものだよね。 老男→老男, 田原

○ウルオイガ アルモンデ…。潤いがあるから…。

中女→老男, 田原

○フライガ トマランクライジャ ナイ カヤー。

笑いが止まらないくらいではないかね。

中女→青男 田原

以上のように「ガ」格助詞の前には具体的な事物や, 抽象的なもの, 及び主体の表示もありえて, 文の中核的な指示の働きがなされている。ただし, 文の途中で中止的な用例も挙げてあるが, これだけでも, 何が表明されようとしているかが, およそ見当がつく。「ガ」格はそのような「主体表示」の働きがある。

次に, 「ガ」格が無助詞化する文例をあげる。

#### 第二節 「ガ」格無助詞化叙法

○ゼニ ホシーモンデ…。銭がほしいものだから…。

老男→老男, 田原

○マメデ ハタラク イチパン タノシー。元気で働くのが一番楽しい。 老女→老女, 小中山

以上のように, 「ガ」格無助詞化叙法はきわめて少ない。ただ, 用法は「ガ」格顕在化叙法の機能とあまり変わらない。たいていは, 「ガ」が表示されるのである。たとえ, 早口で話されても, 「ガ」が無助詞化することは稀である。

「ガ」が省略されることが稀であるということは, 非常に重要な当該方言の特色である。

{ 「ガ」主格顕在化叙法——ほとんどすべての場合  
 { 「ガ」主格無助詞化叙法——きわめて稀

ものごとを述べる際の主体が明示されなくては, 述部への係り受けや叙述の方向も定まらないので, 「ガ」格は省略されにくいのである。とかく, 主語論争が日本語について議論され, 主語がないのが特色だとされ

がちである。しかし、当該方言を見るかぎり、必要な場では必ず「ガ」が使用されていると言ってよいのである。

ここで注意しておきたいのは、古代日本語で盛んだった連体格の「ガ」が採録できなかったということである。たとえば、「我が家」とか「誰が為に鐘が鳴る」などの文例には、出会えなかった。連体格の「ガ」は、もう当該地方では、「ノ」助詞にことごとく交替してしまったと見てよいようである。

## 第二章 主格・連体格「ノ」助詞叙法

「ノ」助詞には大きく二つの用法が見られる。一つは、主格表示の「ノ」である。これは古代より続く伝統的なものである。しかし、このごろは、主格の「ノ」は「ガ」にその席をゆずり、もっぱら連体格の「ノ」が多くなっている。「手の指」とか「～の～の～」とか、やたらに名詞と名詞とをつなぐ「ノ」が頻用される。むしろ、「ノ」が主格を表示し、それに対応する述語動詞がくるという文が非常に少ないのが注目される。

### 第一節 主格「ノ」助詞叙法

○デキノ ワリー ハタワ テンチガエシオ ヤツテ…。(収穫量ノ少ない) できの悪い畑は、転地返し(土を反転させること)をして…。

老男→青男, 赤羽根

○ヤー ヒン クレタ。やあ、日が暮れた。

老男→老男, 中山

先の例で、「デキノ ワリー」における「ノ」は主格「ガ」である。「できが悪い」に相当する。この一文が「ハタ」を修飾している。「デキノ ワリー ハタワ」全体が題目ないしは話題を形成している。

後者の「ヒン クレタ」は、「日が暮れた」に相当する。主格の「ノ(ン)」例は数少ないけれども、このように、「主語-述語」という単純な形式で行われていることは確かである。

### 第二節 連体格「ノ」助詞叙法

この用法は枚挙にいとまがない程である。「～ノ～」の文例を見る。

○ウチノ ネキダデ……。家の近傍だから。

中女→青男, 赤羽根

○オマンノ ホーエ ネー。あなたの方へね。

中男→中男, 田原

○カラドノ ナカノ スジガ コワカ ナルデ イカン。体の中の筋が(年をとると)固くなるからいけない。

老女→青男, 小中山

○メロンノ タンビニ ツチオ カエル。メロン

(作り)の度毎に(畑の)土を(入れ)替える。

老男→青男, 赤羽根

○マンダ ドッチャノ メロンガ エーカシャングドモ……。まだどちらのメロンが良いのか知らないけれども…。

老男→青男, 赤羽根

以上の「ノ」は「名詞」+「名詞」により、後者の「名詞」へかかっていく機能をもつ。ただし両者の結びつきは臨時的であり、常に特定化しているわけではない。しかも「AノB」で表される両者の関係は、包摂だったり、展開だったり、選択だったりして、多様である。

「ノ」は「ン」になることがある。

○ミズン ナカニ オル。水の中にいる。

老男→青男, 小中山

○ワシラン トキヤー……。私らの時には…。

中女→青男, 田原

○ワシラン ホー……。私の家の方…。

老男→青男, 赤羽根

「ノ」が「ン」に変化しても、連体格の「ノ」がもつ機能は、そのまま維持される。つまり、減ったり増えたりしない。単純に音の訛りだけのこととされる。ただし、「ノ」が「ン」になることによって、その土地の方言らしきが増すということは言えそうである。

## 第三章 対格「オ」助詞叙法

「オ」助詞を対格とするか目的格とするかは大きな問題ではない。英文法で言う object を受ける助辞であることに相違はなく、「オ」が顕在しても潜在しても文法的な目的格の表示機能は失われない。

渥美半島方言では、「オ」助詞が使用される文例と使用されない文例とが半々で拮抗している。

### 第一節 「オ」助詞顕在化叙法

対格「オ」助詞が文中で省略されず、そのままで表現される文例を以下に挙げる。「オ」を承ける動詞は他動詞に限られている。

○ヘビオ マタ ニガイタツタ。蛇をまた、逃がしてしまった。

老男→青男, 豊橋市植田町

○ウンチンオ タイテ ヤル。運賃を足してやる。

老男→青男, 豊橋市伊古部町

○ハナシオ サセニャ ノ。話をさせなくてはね。

老男→青男, 中山

○ムスメオ シトネテ ノン。娘を育ててね。

老男→老男, 中山

○オーチャクオ シトツテ ウマイ モノオ クワート オモー。横着をしていて、おいしい物を食べようと思う。

老男→青男, 田原

- ハラー ケラレテ ハラー イタイ。腹を蹴られて腹が痛い。老女→中女, 赤羽根
- フルシキオ ナガイタリ ネー。風呂敷を流したり(して)ねえ。老女→青男, 小中山
- オヤオ バカニ シテ ネー。親を馬鹿にしてねえ(困るんですよ)。老女→青男, 小中山

以上の文例で、使用される他動詞は、「逃がす、足す、する、しとねる、する、する、蹴る、流す、馬鹿にする」である。これらが自動詞として使用されることは当該方言ではあり得ない。

## 第二節 「オ」助詞潜在化叙法

「オ」助詞が潜在化し、文表現に現れない場合も少なくない。次の通りである。

- ツクシンボ トリー イカマイ。土筆を取りに行こう。中女→青男, 田原
- ヒモ トッテ キタ ヨ。紐を取ってきたよ。青男→中女, 赤羽根
- マンダ シゴト センゲナ ヨ。まだ仕事をしないそうだよ。老女→中女, 田原
- タマニ エー コトバ ツカート オモート ハナシャー デキヤ セン。稀に良い言葉を使おうと思うと、話はできない。老女→青男, 小中山
- アーレ オカヒー コト ユー。あれ。おかしい事を言う。老女→青男, 小中山
- ンナー コト イッチャー イカン。そんな事を言っではいけない。老男→老男, 小中山
- タイモ ネー コト ツカウダ モン。ソー コト ツカウ ゼ。愚かな事を使うんだよ。そういう事を使うよ。老男→老男, 小中山

以上の用例を眺めていると、「オ」格助詞が省略され、潜在化する文例に一定の法則は見られない。しかし、「～コト」を承けて次の動詞が続く場合や、「～言葉」を承けて次の動詞が続く場合には、比較的多く「オ」が省略されるようである。つまり、慣用化の著しい場合とか、およその推察がつく場合には、「オ」を省略することがありうる。つまり、「オ」格助詞を省略する場合には、承ける動詞が一般的な日常の頻用動詞に傾くと言えるかもしれない。上掲の文例では「取る、取る、する、使う、言う、言う、使う」という動詞の前の「オ」格助詞が省略されている。土地の方言動詞の前(例えば、「シトネル」の前の「オ」は省略されていないなど)では、「オ」格助詞が省略されていない。この事実について正確な理由は今のところ用意できていないが、そのような傾向が見られることが指摘できる。

さて、ここで一言ふれておきたいのは、上代の「山

を高み」(山が高いので)などの用法が当該方言には存在しない点である。「オ」格助詞を承けて、形容詞連用形で承接するなどという奥ゆかしい句法は、まことに興味ぶかい。しかし、現在のところ、渥美半島方言には、この句法の片鱗をさえ見出しえていない。

## 第四章 「ニ」格助詞叙法

### 第一節 形成法から見た「ニ」格助詞叙法

体言(名詞)を承接して「ニ」が続く場合には、aとbとの二種類がある。

#### a. 体言(名詞)に「ニ」が続く場合

○オンナ ヨニ ヤッテモ……。同じようにして(売りさばいて)も……。老男→青男, 赤羽根  
この文例での形式名詞「ヨ」(様)に「ニ」が承接して続く「やる」動詞は、意味の上で「反復」を表す。同語の反復を表す「ニ」である。いずれにしても、「ニ」は体言(名詞)を承ける普通の格助詞である。最も一般的な「ニ」と言ってよい。他に「ニ」で場所や結果を表すことは勿論ありうる。

これに対して、bの「ニ」は、動詞の連用形を承ける「ニ」である。すなわち、

#### b. ミニ イキタイ ナン。見に行きたいねえ。

老女→中女, 田原  
のような文例である。「行きたい」ことの目的や目標が「ミル(見ること)」で示される。「ニ」格助詞の直前に結論がくるのである。ただし、いつもそのような意味が醸成されるわけではない。「行きには電車、帰りにはバスが良い」という文例では「列挙」の意味になるからである。要するに、ここで、aとbとに分けて考えてみたのは、体言(名詞)に続く「ニ」と動詞連用形名詞に続く「ニ」とがあるということである。その双方に極端な意味上の差があるわけではない。「ニ」格助詞形成法上に二種があるということの指摘にとどめておきたい。

### 第二節 「ニ」格に多様な作用の関係づけが見られる

#### 1. 場所、位置を指定する関係

○タイガイン ウチニ フロガ アラー フー。たいていの家に風呂があるよねえ。

老男→青男, 田原  
固定した「家」に存在動詞「ある」が接続するとき、「ニ」が関係づける働きをしている。

#### 2. 結論、結果、目標が先行し、「ニ」格の後に動詞が続く関係

##### a <ナル>

○イッショ コタニ ナツトル。一緒になっている。

老男→中女, 赤羽根

○ナミダ ナガス ヨーナ ショーセツカニ ナツ  
テ ヨ。(将来は)涙を流すような(小説を書くよ  
うな)小説家になってね。老女→青男, 小中山  
b <スル>

○キョーイクダイニ セラッシャイ。(進学先を)  
教育大学にきなさい(と孫に言うのだ)。

初老女→青男, 小中山

○ナルタケ カワカサン ヨニ シテ……。なるべ  
く乾かさないようにして……。

老男→青男, 赤羽根

c <タツ>

○オヤクニ タチマセンデ ドーモ。お役にたちま  
せんで, どうも。中女→青男, 田原

これらのa~cは「ニ」助詞の前で, 到達結果が述べ  
られ, 「ニ」の後に遂行動詞が来ている。

### 3. 為手の第三者と行動との関係

a <受身形>

○マゴラーニ ジット ワラワレトル。孫らにいつ  
も笑われている。老女→青男, 小中山

b <使役形>

○エンレンニ ツマセヤセン。園芸連に花を摘ませ  
ない。老男→青男, 赤羽根

### 4. 「ニ」格が並列の列挙の役割を担う

○タマネギニ デンプンガ ヤスイモンデ……。玉  
葱にでん粉が安価だから……。

老男→青男, 赤羽根

### 5. 日時・度合・割合・基準を示す

○ソノ ヒニ カワカイテカナ イカンデ……。そ  
の日に乾燥させなくてはいけないから……。

老男→青男, 赤羽根

○コー ウム タンビニ ヘル ゾン。子を産む度  
に(歯やカルシウムが)減るよ。

中女→中女, 赤羽根

○ハラ ハチブニ タベトケ。腹八分目に食べてお  
け。老女→青男, 小中山

○ニホン イッペンニ トル。二本を一度に取る。

中女→中女, 赤羽根

以上の他にも, 「ニ」格助詞には多様な意味が存在す  
る。得られた資料の中から主要な機能を分類してみた。

## 第五章 「エ」格助詞叙法

### 第一節 方向格「エ」助詞

方向を指示する「エ」が明示される文例が, 少なく  
ない。行動に関わる動詞につき, 存在を意味する動詞  
とは関係を結ばない。前者のような場合には「ニ」格  
助詞が機能する。

○ドッカエ オイキル。どこかへ行きなさる。

中女→老男, 小中山

○コッチエ ヨリ ナ。こちらへ寄りなさい。

老男→青男, 中山

○ミカワチエ ハイッタニワ ノー。三河の土地へ  
入ったからにはねえ。老男→青男, 小中山

○カワイサンエ ヨラート オモツテ……。河合様  
の家に立ち寄ろうと思って……。

老男→老男, 小中山

行動を表す動詞の目指す対象の方途が明示されている。  
「エ」は正に「方向」を示すと言うことができる。

### 第二節 潜在形「エ」格助詞

少ないけれども, 「エ」助詞の省略された文例がある。

○アシタ ガッコー イクダ ガンノー。明日, 学  
校へ行くんだよねえ。老女→青男, 小中山

この場合に, 「ニ」助詞と「エ」助詞の両方に可能性  
がある。つまり, 「行く」動詞の方向格指定と考えれ  
ば, 「エ」助詞の潜在形と解釈できる。あるいは, 対  
象そのものを表す「ニ」助詞の潜在形であると考えれ  
ば, 「ニ」助詞と解釈できる。しかし, 「行く」動作の  
方向指示に重点を置いて, この場合は「エ」助詞潜在  
形と見定めることにした。

## 第六章 「ト」格助詞叙法

### 第一節 内実を承けて後続と関係づける「ト」格助詞

名詞(体言とも)を承けて「ト」格助詞が前提部分  
を構成し, 叙述部と対峙する。こういう機能を必然的  
にもつ「ト」格助詞がある。それらは次のような文例  
であり, 説明文中の「物ごと」を解説したり言い換え  
たりするメタ言語表現に多く見られる。

○クスベトモ ユー ノン。(ほくろのことを)ク  
スベとも言うねえ。老男→青男, 豊橋市植田町

○ツバメ, ツバクロトモ ユー ノー。燕, ツバク  
ロとも言うねえ。老男→青男, 豊橋市植田町

○ハゲトル, ヤカントモ イーマス ネー。禿げて  
いる, やかん(薬罐)とも言いますね。

老男→青男, 福江

○ガニエビトカ イットル ヨ。(ザリガニのこ  
とを)ガニエビとか言っているよ。

老男→青男, 波瀬

これらの4例は, 絵カードを見て, この土地ではど  
のように言うかを調査者に教示するときの言い方であ  
る。「トモ」「トカ」には, 係助詞の「モ」「カ」が承  
接している。そのような幅の広い含みを帯びた格関係  
性の骨格をつくるのが「ト」である。「ト」は係助詞  
の前にしか位置しない。いわば係助詞に先行して道を  
開くものである。

さて、「ト」を承けて動詞「ユー」「イウ」が続く。「Aと言う」の叙述において、Aは「言う」の内容、内実、中身を示している。このような関係を醸成するのが、上記の4例における「ト」である。

## 第二節 抗立主体を承けて後続と関係づける「ト」格助詞

名詞（体言とも）を承けて、述部の動詞に対して with とか to とかの対主性とも説明すべき機能を持つのが、「ト」格助詞の、もう一つの働きである。次のような文例がある。

○コドモト ケンカシラニヤ ミレヤヘン。子どもと喧嘩しなくては、(テレビが)見られない。

老女→青男, 福江  
この「ト」は、老男が子どもとテレビのチャンネルの奪い合いをする話題である。「ト」は、喧嘩の対立相手を明示する機能がある。

○ニサンニント イクトサイガ……。二三人と(連れだって)行くと……。

老女→青男, 豊橋市伊古部町  
上の文例での「ト」は、When I am going with two or three friends, …という表現に見られる with (〜といっしょに)の機能を持つ。「対立」と言うよりは「連立」と言うのが適当であろう。

以上のように、「ト」に見られる「対立」と「連立」とを総合して、ひとまず、「抗立主体を承ける」ものとして「ト」を位置づけた。「ト」には他者を特立させる働きがある。

## 第七章 準拠(道具と場所)の「デ」格助詞叙法

### 第一節 道具指示の「デ」格助詞叙法

手段や道具や素材を示す「デ」格助詞と見ることによって、具体的に「デ」が描き出せる。

○コンクリデ コシャツテ ネー(堤防を)コンクリートで作ってね。老女→青男, 小中山

○コーウンキデ ヒックラカイトイテ…。耕耘機でひっくり返しておいて…。老男→青男, 赤羽根

○ジツト テデ ヤットラナ イカンダ フン。いつも手でやっていなくてはだめなんだね。

老男→老男, 中山  
これらの三例は「コンクリデ」「コーウンキデ」「テデ」となっている。作用の相手、つまり、道具の具体例が載っている。

### 第二節 場所や位置を示す「デ」格助詞叙法

ものごとがなされる場所や位置を表示する「デ」がある。文例は次のとおりである。

○イチデ カヤー タカイ。市場で買えば高い。

老女→中男, 豊橋市伊古部町  
○ミナ ウチデ アンカシテ フー。みな家で分解してね。老男→青男, 豊橋市植田町

○オームカシワ フン, ラミデ アツテ フー。大昔はね, 海で行われてね。老男→青男, 小中山

○ドコデ ヤル ノ。どこですか？

中男→中男, 掘切  
これらの「デ」の文例においては、直前に「市, 家, 海, どこ」が来ている。普通名詞を承けて「デ」が位置する。すなわち、この「デ」は「どこどこに於て」の意味を表している。つまり、「デ」の基になっているのは、「にて」である。その「にて」が縮合して「デ」となったと見てよい。場所や位置を明らかに指示する「に」が基本になっているのである。この古めかしい「にて」が姿を消し、他方では「デ」が一般的に行われているとみてよい。文語の色彩が濃い「にて」の例を見出しえていないのは、ことごとく「デ」に変化したものと見なしうる状態とされる。

## 第三節 原因・理由・契機を表示する「デ」格助詞叙法

「デ」には、話しはじめのきっかけを示したり、ものごとの原因や理由を提示して話しの糸口をつくる用法がある。次の文例のとおりである。

○ソイダケデ エー カァン。それだけで良いかしらね。中女→中女, 田原

「ソイダケ(それ丈)」は代名詞と名詞で成り立つ語形である。それを承けて「デ」とする。この「ダケ」は副助詞化していて、すでに用言的な機能があるとは言えども、「丈」の名詞性が残っていてもいる。その中間的な性格が「にて」を原義とする「デ」には馴染みやすいものであったとみてよい。文例では、ものごとの主題や原因、理由を相手に提示するときに「〜デ」と表すものである。こうした話し起こしに「デ」がしばしば用いられる。

次の三つの文例も同じような働きである。

○ソンデ ネーホイ。それでね。

中女→中女, 豊橋市  
○リョコーデ ネー。旅行でね。老男→青男, 田原

○ココノ コトバデ フーホイ。ここの言葉でね。

中女→老女, 赤羽根  
以上のように、「デ」が名詞の中でも主題や話題を話しの起こしに頻出するのは注目すべきことである。なぜならば、話しの契機を示すことによって、話しが展開しやすくなる。そのような支援作用に「〜デ」が機能していると解釈できる。つまり文法の次元をこえて、

「デ」がコミュニケーション支援作用に深く関わる事実をかいま見たことになるからである。

## 第二部 係助詞叙法

### 第一章 「ワ」係助詞叙法

#### 第一節 人称語・指示語・題目語を承けて後続部との係り受け関係を設定する「ワ」係助詞の用法

話題を起こして会話を展開する上で、係助詞の「ワ」は無くしてはならないものである。その係助詞の「ワ」について、特によく聞かれる三つの用法、すなわち「人称語」「指示語」「題目語」の文例を掲げ、表現性の説明をする。

##### 1. 人称語を承ける「ワ」係助詞

###### (1) 「オラー」「オレワ」

- オラー シンジン ワ。俺は信じないよ。  
老男→青男，豊橋市植田町
- オラー ジバラ キッタケドモ ソヤー ヘールケドモ……。俺は自腹を切ったけれども、それは入るけれども……。老男→青男，小中山
- オレワ ノー，オタゾサmano ハイデンオ シラデ……。俺はね，おたぞ様の拝殿を知らないの……。老男→青男，小中山

以上の「オレワ」は、「を格」と関係して他動詞で結ぶ文の人称語として位置する。これらの「ワ」は主格の役割を果たしているものである。人間の本性が発露する最も原初的なもの言いに、「オレワ」があり得る。「オレワ」は男のもの言いであり、「ワシワ」は女のもの言いである。

###### (2) 「ワシャー」「ワシワ」

- ワシャー ソー……。私はそれほど……。老女→青男，小中山
- ワシャ コノ マエ ミテ モラッタラ ナントモ ナイ。私はこの前診てもらったら何とも（病気が）無い。老男→老男，小中山
- ワシャー ヨク ミヤヘンケド フ。私はよくは（あまり）見ないのだけれどね。老男→老男，中山

「ワシワ」は女言葉である。しかし、女言葉の柔らかさを男が真似をして使うような場面も少なくない。以前は「オレワ」も女言葉であったし、男と女とで「オレ」対「ワシ」の区別が厳然と分かれていたわけでもなかった。しかし、相当の古老でない、この節、「オレ」を女性が使うという場は見られなくなった。

###### (3) 「アントワ」「アノヒトワ」

- アントワ エート オモットル。あなたは、良いと思っているの？ 中男→中男，堀切

○アア ヒトワ コヤ コン。あの人はこ（の様子）で）は来ない。中女→老女，赤羽根  
二人称の「アントワ」と三人称の「アノヒトワ」が表現されている。二人称へは対人質問文である。三人称では「I imagine that man will not come at this situation.」のように名詞句の中身だけを表現した形式となっている。したがって、「私は思うのだが、「あの人はこれは来ない」という深層構造までは表現されていない。しかし、表層の形式で十分に深層まで推察しようとするところに言語生活の奥の深さがある。

##### 2. 指示語を承ける「ワ」係助詞

###### (1) 「コヤ」「コヤー」「コレワ」

- コヤ シカタ ネー。これは仕方がない。老男→老男，小中山
- コヤー ナンダイ ナー。ツクシダ カヤ。これは何だろうなあ。土筆だろうかね。老男→老男，小中山
- コレワ ゴーリ カン。ワラゴーリ。これは草履かね。藁草履だ。老女→青男，田原
- 以上の三例は、指示語「こそあど」の「これ」を「ワ」係助詞で承けて話題を設定するものである。ちょうど、「僕はうなぎが好きだ」のような文とか「これは僕が書いた本だ」のような語順で、文の初めに「ワ」が来る。文頭性というか、文初性とも言うべき性格がこの「ワ」には存在する。

###### (2) 「ソヤー」「ソヤ」

- 指示語の「それ」を承ける「ワ」によって形成される。
- ソヤー アカルク ナッチャウ。それは明るくなってしまう。老男→青男，堀切
- ソヤー シバッタ プンニャ オソガイ ヤー。それは縛ったものでは恐ろしいねえ。中女→中女，赤羽根
- ソヤー ワカラー。それは勿論分かるよ。老女→青男，小中山
- ソヤ アッタ ㊀。それは勿論あったよ。老男→青男，豊橋市伊古部町

不思議なことである。共通語では、単純に「これ」は近称、「それ」は遠称の指示語であり、それ以上の外延的機能は問題にならない。しかし、当該方言では「これ」は単純な近称の指示であるが、「それ」は確かに、遠称の指示機能もありはするが、それ以外に「当然」とか「勿論」とか「あなたもご存知の通り」とか「naturally」とか「言うまでもなく」とか「言わば」とか「ええっと、まあ、そうだなあ」などの“潜在共有知”という働きがある。

したがって、自分だけが驚いた時には、

- こりゃあ 驚いた。

とは言えるが、

\*そりゃあ、驚いた。

とは言えないのである。「それ」は複数の人々の共通の知識をさす概念でなくてはならないのである。

### 3. 題目語を承ける「ワ」係助詞

話題のキーワードを出して、何が言いたいのかを焦点化させる。「～は」と表現することによって、話が鮮明になる。次の文例を見よう。

○キョーピワ カワリマシタ ネー。このごろは変わりましたね。老男→青男, 福江

○コトシワ ネガ エーガ ノー。今年(は)は(作物の)値段が良いねえ。老男→青男, 豊橋市伊古部町

○ハタケワ ヤラー フ。畑仕事はやるよね。老男→青男, 赤羽根

○ゴンシゴトワ カツケド ネー。根気よく仕事をする(人)は(怠けて仕事をする人に)勝つけれどね。老女→青男, 小中山

テーマとか主題とか話題とかと言われるものを「ワ」係助詞が承けて、会話が展開される。この種の「ワ」の用法は、最も自然な会話の支え手なのである。

### 第二節 主格の「ガ」との互換性に立つ「ワ」係助詞の用法。

「私は悲しい」とか「私は買い物に行きたい」などの普通の言い方が、すぐに思い出される。「ワ」には話し手の意志や感情と結びついた表現がふさわしいと認識されている。したがって感情形容詞や他動詞で述部が結ばれた方が、いかにも話し手の思いをつづった表現らしさが出ていると見られるだろう。

しかし、「水が流れる」とか「風が吹く」とかのような自然現象を描写する主格の「ガ」に相当する表現と互換性をもつ「ワ」がある。これも少なくないので、とりあげておきたい。当然、述部の動詞は自動詞である。注意しなくてはならないのは、「ガ」で表現し得るところを強いて「ワ」で承けとめ主体的な内面化を図っている点に、文脈上の配慮があることを汲まなくてはならないということである。

○テワ マワラン ゼン。(田んぼに)手が回らない(手間ひまかけられない)よ。

老男→青男, 赤羽根上の例では、「手が回らない」という慣用句があるのを強いて「手は回らない」と表現している。多忙で労働力も資金もなくて、やりたくてもやれないもどかしさを、「ガ」を「ワ」に変換することによって表現したのである。主体的心情を表す「ワ」は自動詞の「回る」との摩擦を生じていない。以下の文例も皆、文末は自動詞が形容詞である。

○フルイ キワ ナク ナツチャツタ。古い木は無くなってしまった。老男→老男, 中山

○ギョギョーシャワ オーゴエニ ナル ネー。漁業者は大声になるねえ。中男→青男, 福江

○パチンコデ カテル タメシャー ナイ。パチンコで勝てる例はない。老男→青男, 田原

### 第三節 対格「を」助詞相当の表現機能に立つ「ワ」係助詞叙法

文末に他動詞が来て、文頭又は文中に体言(名詞)を承ける「ワ」が位置すれば、その「ワ」が対格の「を」格表示機能を有することが予想される。ただし、「を」の所に「は」を適用することが可能だということであり、「は」が「を」の機能を代用することなどはできない。また逆に、「は」の所に「を」を当てはめることは不可能ではないけれども、主観性がそなわれるので却って不自然になる。ここで問題にするのは、格助詞「を」と係助詞の「は」とには全く異なる相互の機能があることを認めつつも、「を」格に「は」係助詞の主観性が関与していく場合がある点を取り上げるのである。本来の出自から言えば、たとえば、「を」が「は」にとって換わるのではなくて、格助詞「を」を承けて「は」が続き、「～をば」となってもよいはずであろう。「花をば折っちゃあ駄目じゃないか」というように、「をば」と接合することが想像される。しかし、当該地方では、これがない。「花を」か「ハナー(花は)」かのどちらかである。「をば」がないとなれば、「を」を包みこんで主体的心情を表す「ワ(は)」の修辭的技法によりかかることになるのである。以下に文例を掲げる。

○ハナシャー キキオツタ ネ。話は聞いたことがあったね。老男→青男, 田原

○タイワンワ ウツタダ カイ。台湾産のは売ったのかね。老男→老男, 小中山

○ホカノ コター シラナンダケド ネー。他の事は、知らなかったけれどね。老女→青男, 田原以上の文例で「聞く」「売る」「知る」などの普通の他動詞が係助詞「ワ」の後に続いて現れている。私どもの日常生活では、話し手の他動的意志が、その度ごとに、客観的な事実を述べる場面であっても、たとえば、「話を聞きおったね」と言うことができる際にも、「を」を「は」に換えて、「話は聞きおったね」と自分の体験に深く関わらせて述べたりするのである。

### 第四節 格助詞または副助詞に係助詞「ワ」が承接する叙法

微妙な表現を分化させて豊かな言語生活ができるの



は幸福なことである。たとえば、「校庭にブランコがある」と「校庭にはブランコがある」とを比べてみよう。「～には」とすると、何かしら次に文章が展開しそうな感じが感じられてくる。そういう人間臭さというものが、出てくる。係助詞の「ワ」には、格助詞にない作用性が見られるのである。

「ワ」は多く助詞を承接して繊細な文脈的意味を醸し出すが、ここでは、「ニャー (ニワ)」「ジャー (デワ)」「マジャー (マデワ)」「グライワ」に限定して説明する。

(1) 「ニャー (ニワ)」

○クモ、キョービニャ カケトル ヨー。蜘蛛、このごろは、架けているよ。

老女→青男, 豊橋市伊古部町

○オラン ホーニャ オラン ナー。うち (家) の方にはいないねえ。

老男→青男, 波瀬

○ウント マエニワ イランナダ。うんと (ずっと) 前には要らなかった。

老男→青男, 堀切

これらの「ニワ」の文例で格助詞の「ニ」を省いても意味が通る。しかし、「ニワ」の文例のうち、「ワ」を省くとかなり不自然な文になる。自動詞の前の「ニワ」において、熟合した「ニワ」に必然的な役割が生じていることを意味して十分なものとされよう。

別の特別な話題を記しておきたい。たとえば、天皇即位50年を記念する行事で、「このたび天皇陛下には、めでたく即位50年をお迎えになられ……」と言いはじめるであろう。最高の敬意を表すべき第三者に対して、「ニワ」が特別な働きを示すことにも思いを致しておくことは興味深い。

(2) 「ジャー (デワ)」

体言を承けて「何々では」と言う場合の表現形式がある。

○ジノ モノジャ ナイ フー。土地の物ではないね。

老男→青男, 田原

○カワカイチュー ネー。イマジャ ミタ コト ナイ ネー。川貝と言うね。今では見たことがないね。

中女→青男, 堀切

○ココジャャー モーケ イクテ コトガ デキンダワ。ここでは、金儲けに行くということができないのだよ。

老男→青男, 堀切

○マー ココラジャャー オンシツガ オーテ……。まあ、ここら辺では、菊作りの温室が多くて……。

老男→青男, 赤羽根

○ワシラジャャ ワカヤセン。私らでは分からない。

老女→青男, 小中山

以上の例は共通語の用法と同じである。特に「では」とりたてて述べるべきほどのことはない。

(3) 「マジャー」「マデワ」

「まで」を格助詞とするか副助詞とするかは説の分かれるところであろう。「AからBまで走る」となれば、「から」も「まで」も格助詞と見なした方がつじつまが合う。しかし、格助詞の複合や熟合はありえないという立場であれば、「今までが駄目だったので、明日からが大切だ」という場合の「まで」や「から」は副助詞と考えざるを得ないであろう。ところが、「ワ」は係助詞であり、「まで」が格助詞であるか副助詞であるかに関係なく、その分別に拘束されずに接続しうる。

文例は次のとおりである。

○コレマジャー アタランナダ。これまでは当たらなかった。

老男→青男, 堀切

○イママデワ ソンナ オーキカ ナイ ワ。今迄はそんなに大きくはないよ。

中女→青男, 赤羽根

○キュータンマデワ イツチャー オヤヘン。(田畑の合計が) 九反までは行ってはいない。

中男→青男, 堀切

○ヒザマデワ クヤヘン。膝までは (田の水が) 来ない。

老女→青男, 小中山

以上で知られるように「期間・時間・分量・位置」などの到達点を示す「まで」を承けて「ワ」で括り、提題化するという表現形式ができています。

(4) 「グライワ」

副助詞に「ワ」が続く文例は少なくない。それらの中で、ここでは代表例として「グライワ」を取りあげることにした。

○フタリグライワ カカル ワフー。(温室農業では)

二人ぐらいは要るよねえ。老男→青男, 赤羽根  
およその概数を述べて、それを話題にとりあげていく表現様式が、これである。「グライワ」と表現して、文末の「ワフー」と呼ぶさせる。これらの「ワ」は「私 (吾)」であり、「私の思うところによれば」の意図が如実に、しかも、随所にたち現れた言い方になっている。

第五節 “動詞連用形+「ワ」+打消の助動詞”による婉曲否定法

「行かない」と直接に打消されると相手の人が気落ちするかもしれない、と先回りして、「行きはしない」と言う。同じことなのに、「行きたかったけれど、都合がつかなくて、どうしても行くことができず、そこで、行きはしないことにした」のだと婉曲に表現して相手に気を遣う。こういう用法の「ワ」が当地方には多く聞かれる。たとえば「言わない」が「言いはしない」となり、訛って次の文例のようになる。

○イヤー ヒンケド ㊦。言いはしないけれどね。

老女→青男, 小中山

「しない」が「セン」から「ヒン」へと音転訛する。このように激しく転訛すれば、係助詞の「ワ」がそこに介在しているのかさえ分かりにくいかもしれない。しかし、「イヤー」の原形は「言いは」であり、「言う」の連用形に「ワ」が承接しているのである。この叙法をとることによって、当たりの強さを緩め、もって回った否定叙法をつくりあげる。真綿でも包んだような打消しが頻繁に用いられる。これは老若男女を問わない。むしろ女性のもの言いに多く聞かれる。

○イヤー シン ㊦。言いはしないね。

老女→青男, 小中山

○モツチャー イケヤ ヘンデ。持っではいかれないから。

老女→青男, 田原

○ヤレヤ ヒン。ヤレヤ センゲナ。シランケド。

やれない。やれないそうだ。知らないけれど。

老女→青男, 小中山

○ツマズキャ センケド……。つまずきはしないけれど……。

老女→青男, 小中山

○イマワ チガワ セン。今は違いはしない。

中女→青男, 堀切

○ケッコニ ワカヤ センデ ナ。要するに、分からないからね。

老女→中女, 小中山

○マノビヤ ヘンケド ㊦。もう伸びはしないけれどね。

老男→老男, 中山

○デキヤ センモンダ ㊦。できはしないものだからね。

老女→青男, 小中山

文例が圧倒的に女性の発話となっている。この婉曲語法が当該地方で特に女性の言い方と見られていることを示してもいるのである。

(つづく)